

大後秀勝と「大日本海陸全図」（未定稿）

石橋智紀

『大日本海陸全図 聯接朝鮮全国並樺太』の著作者である大後秀勝（おおじり ひでかつ）の経歴と、『大日本海陸全図 聯接朝鮮全国並樺太』（以下『大日本海陸全図』と呼ぶ。）について確認する。

参考にした文献の主なものは次のとおり

1. 日本地図資料協会の「月刊古地図研究」に昭和 50 年 4 月・6 月（第 6 輯、61 号・63 号）に掲載された斎藤敏夫『近代海図第一号の編図者 大後秀勝の生涯と業績について』は、大後秀勝について貴重な情報を提供しているが、途中で連載が終わっているのと、記載に誤解を招くようなところがある。
2. 水路部 編『水路部沿革史 明治 2-18 年』大正 5 年（1916 年）2 月刊
（国立国会図書館デジタルコレクション info:ndljp/pid/10304435）
海軍水路部の公式な沿革記録。「凡例」から編纂は明治 6 年以降の職員である石川洋之助が当たっていることが分かる。「緒言」に「明治四十一年七月廿一日」とあるので明治 41 年には、編纂がほぼ終わっていたものと思われる。
本論文において、引用元で『沿革史』と書かれているのは、本書である。
3. 水路部 編『水路部沿革史 自明治 19 年至大正 15 年』昭和 10 年（1935 年）11 月刊
（国立国会図書館デジタルコレクション info:ndljp/pid/1899660）
『水路部沿革史 明治 2-18 年』の後を受けて刊行された水路部の公式な沿革記録。大後秀勝については退職の記事しか見付けることができなかった。
4. 毎日通信社『東京社会彙纂』大正 2 年（1913 年）12 月刊
（国立国会図書館デジタルコレクション info:ndljp/pid/3459889）
大後秀勝の海軍省退職後について、この書籍から知ることができた。

そのほか、国立公文書館アジア歴史資料センター（アジア）で防衛省防衛研究所所蔵の文書を確認した。（JACARC）とあるのが、レファレンスコードである。

1. 明治3年以前

明治 3 年の兵部省出仕以前の事はよく分かっていない。斎藤敏夫『近代海図第一号の編図者 大後秀勝の生涯と業績について』には次のように書かれているが、細部に考察の余地がある。

「…多感の青年時代は世は騒然たる幕末であった。彼はひとり絵のみに専念は許されなかった。藩命で江戸小川町の講武所に入所した秀勝は洋兵術に砲術に測量製図にと明け暮れ

ている。

此の頃の田辺の家士からは洋学で数学測量学航海学に有名な高柳楠之助が出て同じ兵部省に入っているから彼にはその此の人の影響が多分にあったとして差支えない。

慶応年中になって、幕府が仏人を招いて、麾下の士に、仏式訓練を開始した時、紀州藩を離れて幕下に入った安藤家の安藤弘三郎に附属、一隊の指揮役として教練に励んでいる。そして維新、将軍慶喜の版籍奉還後安藤家は独立して、田辺藩となったが、秀勝又故郷田辺町（和歌山県）に帰り明治二年六月田辺藩士族として専ら高柳と共に藩兵の編成訓練を*当し、傍ら銃砲の制作製図に従って居た。」

大後秀勝は天保 11 年 5 月 8 日、紀州徳川家の附家老の安藤飛驒守直裕の家臣であった大後一保の長男として江戸の藩邸で生まれる。（安藤飛驒守家の上屋敷は、現在の文京区 2 丁目にあり、現在も「安藤坂」の名が残っている。）幼名は虎太。

後に、安藤家の一族（紀州藩の附家老となった初代安藤直次の嫡子であったが大阪夏の陣で戦死した重能を甥の直政を娘婿として迎えてできた寄合旗本）で 4,535 石（屋敷は市ヶ谷左内坂）であった安藤弘三郎直礼に仕えていたことは確かである（『藤巖公伝記』によれば、直礼の左内坂の所有邸を「直礼君御旧臣」の大後秀勝が購入している。）

大後秀勝の生存中の大正 2 年に出版された『東京会社辞彙』には「君壮年の頃西洋砲術を学び頗る蘊蓄あり、後幕府の講武所教授役に挙げられしが、維新後藩に帰り専ら練兵を担当し傍ら銃砲の製図に従ふ」とある。

いくつか幕府の「講武所」に関する書籍や、和歌山県の公文書館所蔵の「旧田辺藩関係資料」を確認したが「大後秀勝（または虎太）」の名前を確認することができなかった。

2. 海軍の製図担当として(明治3年～明治 28 年)

明治 3 年 5 月 7 日に「大後虎太」が、海軍の「操練所製図生」を申し付けられたところから、海軍の記録に大後の名前が見られるようになる。(JACARC09090045500)

- ・明治 3 年 11 月 5 日に「兵学少属」に任じられている。(JACARCC09090054500)
- ・『海軍兵学校沿革 第 1 巻』には、明治 3 年 12 月 28 日現在の海軍兵学寮の職員として「兵学権少属 製図 大後秀勝 虎太、静岡」とある。
- ・明治 4 年には「春日鑑」（艦長は柳橋悦少佐）による北海道沿岸測量に同行している。この測量には英艦「シルビア」が同行し、測量術の指導等を受けている。

～この沿岸測量中の旧暦 7 月 28 日（9 月 12 日）に「兵部省海軍部水路局」の設置が決定され、昭和 16 年（1941 年）の水路部創立 70 周年記念事業を期に、年 7 月 28 日を「水路部の創立の日」として制定。昭和 46 年（1971 年）の創立 100 年を期して、太陰暦から太陽暦に換算し、9 月 12 日を水路部創立の日として制定し、この日を記念して、『水路記念日』としている。～

- ・明治4年9月『兵部省海軍部内条例』が定められ、海軍部内に「秘史局、軍務局、造船局、水路局、会計局」の5局が置かれる。
- ・明治4年11月15日に、大後秀勝は、海軍兵学寮から水路局に所属替えになっている。同時に「十等出仕」になっている。（それまでは兵学寮に所属したまま、水路局で働いていたようである。）（JACARC 09090239300）
- ・明治5年2月 「兵部省」を廃止。「陸軍省」「海軍省」が置かれる。
- ・明治5年3月 九等出仕に昇等（JACARC09110135600）
- ・明治5年8月 海図第一号「陸中国釜石港之図」刊行
「編者曰フ此測量原稿ノ製図ハ大後秀勝ノ担任スル所ニシテ其製図法ハ全人カ英鑑「シルビア」乗員大尉ベーリーニ就キ懇切ナル教授ヲ受ケタルニ由ル爾来狩野家ノ後裔狩野守貴狩野応信等ヲ採用シタルモ皆多少大後ノ指導ヲ受ケ其他ノ製図員モ其指導ヲ受ケタリ」（p 55-56）
- ・明治5年10月13日に「水路局」から「水路寮」に改編。（「水路寮九等出仕」となる）
- ・明治6年9月 製図課長心得（JACARC0911138700）（『沿革史』 p 70.）
- ・明治9年8月 「海軍職制及事務章程」（太政官無号達）発布。「水路寮」が廃され「水路局」が置かれる。
「編者曰フ此海軍省改革ハ純粹ノ文官組織ヲ変シ十九年純粹ノ武官組織トナルノ階梯ニシテ…」（『沿革史』 p 164）とあり、文官である大後秀勝が海軍省内で、出世する見込みは、ほぼなくなったのだと思う。
- ・明治10年2月 海軍省十号出仕大後秀勝 製図課長心得を命じられる。（『沿革史』 p 182）
注）明治9年10月に「水路局」内に「製図課」が設置されているが、大後は「製図課長」にはなっていないようである。『沿革史』 p 165 を見ると「製図課長」になったように見える。「製図課長」職が置かれ、大後はそれに擬されているようであるが…）
（明治10年、13年の文書には「十等出仕」となっている）
- ・明治13年2月柳水路局長から川村海軍卿に大後の「加俸増給」について上請が行われている（JACARC09114013200）
- ・明治15年3月 十等出仕大後秀勝、二等属石川洋之助と共に「図誌課副長」を命じられる（？）（『沿革史』 p 352）
- ・明治15年9月 「九等出仕大後秀勝 図誌課副長心得」から「図誌課副長」（JACARC 11082214600）
- ・明治19年1月 「水路局」は廃止され「海軍水路部」が設置された
- ・明治23年6月30日 「叙勲八等賜瑞宝章 海軍一等技手 大後秀勝」（明治23年7月1日『官報』）
- ・明治28年4月18日 大後秀勝退職

「十八日 海軍技手大後秀勝依願本官ヲ免ゼラル、同技手ハ当部創業最初ノ製図掛トシテ明治三年入部（当時兵部省海軍部）以来勤続二十五年ニ及ビ其ノ間製図事業ニ貢献スル所大ナルモノアリシガ本年停年ニ達シ退職ス」

（水路部『水路部沿革史 自明治 19 年至大正 15 年』1935 年 11 月、p 66）

3. 日本郵船の社員として

大後秀勝の没年について、先行文献が「明治 34 年（1901 年）」としているにもかかわらず『水路部沿革史 明治 2-18 年』の「緒言」で「終ニ臨ミ一言セン水路事業創建ニ関シ努力尽瘁セラレタル人ニシテ…其今日ニ存セラル、人ハ…而シテ製図事業ニ在テハ元海軍技手大後秀勝トス…」とあり、「緒言」の書かれた明治 41 年（1908 年）には存命だった記載があったため、他の文献から大後秀勝の没年を探ろうとした。

『東京社会彙纂』という、大正 2 年（1913 年）に刊行された人名録に、大後秀勝の記事を見つけた。（p オヲ 57）

「▲大後秀勝君 君は東京府士族なり、元紀州田辺藩士大後一保氏の長男にして天保十一年五月八日を以て生る、君の家は華道石州流の家本にして厳君一保氏は頭脳明晰の人にして夙に測量製図に興味を有し当時未開の時代に於て早く既に斯学の蘊奥を極め当時稀に見る製図手たりしは人の知る所なり、君壮年の頃西洋砲術を学び頗る蘊蓄あり、後幕府の講武所教授役に挙げられしが、維新後藩に帰り専ら練兵を担当し傍ら銃砲の製図に従ふ、明治三年兵部省出仕を命ぜられ海軍操練所の製図手を経て権少属に任ぜられ四年軍艦春日に搭乗して本邦沿岸の測量製図に従事し、後海軍水路局の製図長となり陸中釜石港の図を製して名声頓に揚がる、爾来同局の一等製図師に昇進し、製図彫刻及印刷等の総掛長挙げられ在職二十五年余の久しきに及べり後海図の売捌方を日本郵船に托せらる、や同社員となり払下図の改訂に従ふ在職又十七年に達せり、君在官の日従七位勲七等に叙せらる」

海軍省退職後の大後秀勝が「日本郵船」に再就職していることが分かったため、日本郵船株式会社の「日本郵船歴史博物館」に「大後秀勝」について問合せたところ、日本郵船歴史博物館の山田喜之氏より回答があり、次の事が判明した。

- ・明治 28 年（1895 年）6 月に入社。営業部調度係 技手として配属。
- ・大正 7 年（1918 年）8 月に依願解傭（＝依願退職）。
- ・没年は昭和 2 年（1927 年 11 月 24 日、行年 88 歳）※青山墓地の墓誌による。

『水路部沿革史 自明治 19 年至大正 15 年』の明治二十八年六月に「当部発行ニ係ル図誌類ハ従来書肆松井忠兵衛ノ引受ケ販売スル所ナリシガ元来海図類ハ不断ノ改補ヲ要シ水路告示ノ意義ヲ了解スルモノニシテ始メテ其ノ資格ヲ得ル次第ナレバ之ヲ日本郵船株式会社ニ取扱ハシムル方然ルベシトノ意見ニ基キ本年五月同社ノ水路図誌販売方ニ付上申ノ処茲ニ

認可セラレ自今図誌ノ販売ハ日本郵船ニ移レリ」

『水路部沿革史 自明治 19 年至大正 15 年』の大正三年四月「当部刊行ノ図誌類ハ従来日本郵船株式会社ニノミ許可シアリシガ本会計年度ヨリ雑用海図ニ限り小林又七（川流堂）ニモ販売ヲ許可ス」

とあり、その他の記載を見ても日本国内だけでなく、海外にも販売拠点を持っていた日本郵船株式会社に販売を委託するのはメリットのある事だったようである。

日清戦争時には大後秀勝は海軍省を退職していたが、在職中に作成した海図が戦争に活用されたらしく、戦後、功績により従軍記章と一時金が与えられている。

・明治 28 年 12 月 30 日 日清戦争の功により勲七等瑞宝章と金百圓を授与される

「叙勲七等授瑞宝章

元海軍技手従七位勲八等 大後秀勝」

「

元海軍技手従七位勲八等 大後秀勝

明治二十七八年戦役ノ功ニヨリ勲七等瑞宝章及金百圓ヲ授ケ給フ」（明治 29 年 1 月 27 日『官報』）

・明治 30 年

「

元海軍技手従七位勲八等 大後秀勝

明治二十七八年従軍記章条例ニ依り海軍大臣ノ奏請ヲ允シ明治二十八年十月八日ノ勅諭ノ従軍記章ヲ授与ス」（明治 30 年 5 月 19 日『官報』）

大後秀勝の没年が「明治 34 年（1901 年）」とされた理由は『近代海図第一号の編図者 大後秀勝の生涯と業績について』に於て秀勝の父一保について「一保は插花を嗜み茶道に通暁石州流家元第四世として致仕後は松州庵と名乗り、晩年は石生庵一保として明治三十四年十一月三日歿する迄九十三年の天寿を全うした」とあるのを秀勝の没年と勘違いした人がいて、それが引用され続けているようである。

養子の大後秀勝は、椿椿山の甥。明治 13 年に海軍省水路局出仕。彼は武官としてキャリアを重ねていった。

大植四郎 編『明治過去帳：物故人名辞典 新訂版』東京美術、1971 年 p 1152)

「椿 郁子 東京府豊多摩郡千駄ヶ谷町大字千駄ヶ谷八七〇大蔵省官吏椿韜母 旧幕臣椿真如の次女にして画家椿椿山の義姉に当り文政七年生る廿載亡椿尚賢に嫁き謡曲と仏教に帰依し明治四十三年二月廿八日没す年八十七 五男二女あり三男綏は退役歩兵少佐、四男冕は歩兵大佐、五男大後五郎は海軍水路大監たり」

4.『大日本海陸全図 联接朝鮮全国並樺太』

ここでは、竹島問題との関係から、海軍水路寮がどのように朝鮮沿岸の地理情報を充実させていったかを『水路部沿革史 明治 2-18 年』の記述から確認し、それがどのように『大日

本海陸全図』に反映しているか検討したい。

・明治5年8月 朝鮮及対馬付近の図を外務省より借用

『水路部沿革史 明治2-18年』によれば「朝鮮及対馬附近ノ図ヲ外務省ヨリ借用シテ之ヲ臨写シ僅ニ該地方ノ略地図ヲ得タリ当時ハ準備供給共ニ大抵写図ヲ以テ臨時ノ供給ニ充ツ」(『沿革史』 p 54)

・明治6年7月『朝鮮全図』刻成

「朝鮮全図彫刻成ル但シ編者未詳ノ東洋古式ノ図ヨリ編纂シタルモノニシテ殆ト海図トシテ見ルヘキモノニアラス」(『沿革史』 p 65)

・明治7年6月 民間人の「日本航海全図」出版の不許可

「大阪人某英版日本航海全図ヲ反訳刊行センコトヲ請願ス之ヲ許サス」(p 99)

・明治7年10月 海図出版ニ関スル法律

「当時水路上ノ知識ハ殆ト一般ニ通スルモノナク従フテ民間ニ於テ粗略ノ測量図ヲ刊行シ且ツ其改正ノ要アルヲ知ルコトナク却テ船舶ニ障碍ヲ与フル少ナカラス依テ海図ノ調製ハ当寮ノ職司トシテ一般ニ布告ヲ発セラレ度旨上請ノ結果太政官第一一〇号ヲ以テ左ノ布告アリ

中外諸国海図ハ海軍省水路寮ニ於テ実測実測ノ上刊行候ニ付御国人民新ニ礁洲ヲ発見シ港湾ヲ測量候者有之候ハ、図面相添ヘ速ニ全寮ヘ可届出候此旨布告候事

但シ礁洲ヲ発見シ港湾ヲ測量候者届出節ハ全寮ニ於テ取調確實ノ上ハ本人姓名ヲ其海図ニ記シ施行ス若シ又他ノ海図等自カヲ以テ版行致度者ハ全寮ヘ伺出ノ上施行可致事又文部省ヘハ海図類出版願出候者有之トキハ水路寮ヘ照会ノ上可差許旨達セラル(当時出版物ハ文部省管轄)」(『沿革史』 p 110-111)

・明治7年11月及12月 露国版海図の翻訳を外務省に依頼する

「露国版海図ノ反訳ヲ外務省出仕諸岡通義ニ托ス爾後之ヲ例トス」(p 113)

・明治8年2月『朝鮮東岸』刻成

「朝鮮東岸及金角湾婆衣婆太湾(Voevoda bay)ニ図刊成ス但シ露版ノ覆版ナリ当時露国語ノ訳者ナク横浜碇泊露艦「ガイダマーク」ニ就キ質問ノ上之カ解釈ヲ得タリ」(『沿革史』 p 120)

注) ヴォエヴォダ湾はロシア・ウラジオストクのルースキー島の南にある湾。

・明治8年5月 第二丁卯艦の測量

「第二丁卯艦ハ対馬及朝鮮沿岸ノ測量役務ヲ命セラレ海軍中尉吉田重親、海軍少尉補外三名乗組出測ニ従事シ長門彦島ノ福浦港、対馬ノ巖原及阿須港並ニ西泊港、朝鮮ノ釜山港ヲ測量シ対馬及釜山ノ記事ヲ調査シ帰途十月ニ至リ宇和島及佐賀ノ関海峡ヲ測量シタリ全時雲揚艦ハ朝鮮江華島砲台ト砲戦ヲ開キ国際問題ヲ惹起シタル為メ十一月第二丁卯艦ハ朝鮮回艦ヲ命セラレ中牟田西部指揮官ノ管轄ニ属シ金

木少尉補外一名乗組ノ儘ニテ在韓邦人保護トシテ全地ニ回艦セリ」(『沿革史』 p 126)

・明治8年5月

「朝鮮漢江ノ仏測海図三葉陸軍省ヨリ本省へ廻付ノ分至急謄写スヘキノ命アリ即チ鹽河第一第二(漢江江華島東岸ヨリ濟物浦附近之部)小陵河(江華島北部ヨリ上流ノ漢江)ニシテ孟春艦ハ写図ヲ得ルノ遑ナク朝鮮ニ急航セリ

編者曰フ当時朝鮮西岸ハ一ノ英図アルナク此粗略ヲ極メタル仏測図ハ唯一ノ貴重図トシテ各方面ヨリノ頻繁ナル要求アリ其謄写上最モ困難ヲ極メタリ又水路誌ニアリテハ嘗テ台湾蕃地事務局ニ於テ反訳セル英版支那海水路誌ノ一部及一仏国人ノ粗略ナル航海記事ノ訳本ヲ訂正シ写本ヲ以テ其急需ニ応シタリ此等ノ急需ハ本月雲揚艦ト江華島砲台トノ砲戦開始ヨリ十二月黒田弁理大臣ノ渡韓国際談判ニ至ル迄止マサリシ」(『沿革史』 p 135-136)

・明治9年 民間出版図書の検査

「明治八年出版条例布告ノ結果図書ノ検査ハ内務省ニ属シタルヲ以テ民間刊行ノ図書ハ総テ内務省図書局ニ於テ其出版ヲ許否スルコト、成リタルモ海図ハ明治七年第百十号布告ノ効力ニ依リ該条例以外ニ属スルヲ以テ民間ニ於テ出版出願ノ図ニシテ海図ニ類似スル者ハ一応図書局ニ於テ水路局ノ意見ヲチョウシ然ル後許否ヲ決セラレ度照会ノ結果図書局ヨリ 大後秀勝著大日本海陸全図ノ外民間著日本輿地図ノ類ハ廉廻付アリ

編者曰フ本件ハ書類ヲ欠クモ記憶ニ依レハ此等ノ図ヲ検スルニ 大日本海陸全図ハ漸長図ニシテ水深等ヲ記シ各港分図ヲ附載シアリ海図ニ類スルヲ以テ著作人ヲ取糺シタルニ右ハ版權願下絶版中ノ趣判明ニ付本図ハ返付其他ノ諸図ハ水深ナキモノハ差支ナキ旨回答セリ其翌年三月ニ至ル迄爾後全局ヨリ民間出願ノ地図類ヲ数多回付シ来リ検閲上其繁ニ堪エス遂ニ水深ノ記載ナキモノハ回付ニ及ハサルコトニ示談シ後漸ク其跡ヲ絶ツニ至レリ蓋シ当時第百十号布告アルニ拘ハラズ民間ニ於テ英図ヲ覆版シ或ハ粗略ノ測図ヲ出版シ航客ノ需メニ応シタルモノアリシヨリ止ムヲ得ス検査ノ手段ヲ取ルニ至リシナリ」(『沿革史』 p 173-174)

注) 下線引用者

大後美保『水路部昔がたり 一大後五郎覚え書より一』(日本海洋学会「海洋の科学」第3巻第6号、小山書店、昭和18年6月)には『大日本海陸全図』について次のように書かれている。(p3)

「此頃、秀勝は公務の余暇に「大日本海陸全図」といふものを作った。之は6尺四方計りの図で、九州の南端から北海道を含んだもので、琉球の諸島と千島とを分図とし、外に港の分図をも記したものである。又、朝鮮の全図と、支那の東海岸が含まれてをり、之が当時もし公刊されたならば我国最初の新式地図として非常な歓迎を受けたことであつたと思はれる

が、1年半を費やして作成された同図の刊行は賛否交々の議論の中に揉まれた揚句、遂に世には送られず、秀勝は版製作その他の損害を全部1人で引受けるといふ結果となり、柳氏その他の同情は受けたものの図の運命は遂に悲運に終つた。之は同図が売出されると、前刊の海図と類似のものである上、海図の販路妨害になるといふやうなことから内部に種々の異議が唱へられたためである。」

注) 大後美保(よしやす)は五郎の子

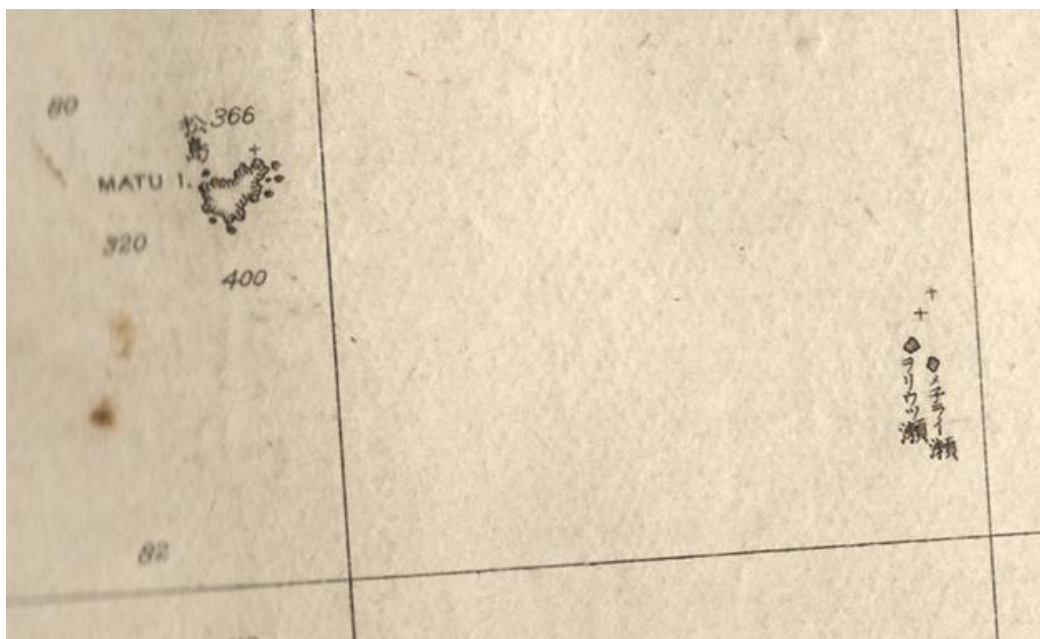
『大日本海陸全図 聯接朝鮮全国並樺太』の題字の下には「明治九年三月」と書かれており、「明治八年十二月十七日版權免許」の文字も見られるため、作成の時期が分かる。

地図の内容をみると、朝鮮半島の東岸については、パルラダ(パラダ)号による1854年(嘉永7年)の測量による海図が元になっていることが分かる。水路部では明治8年2月に翻訳したものが出版されている。

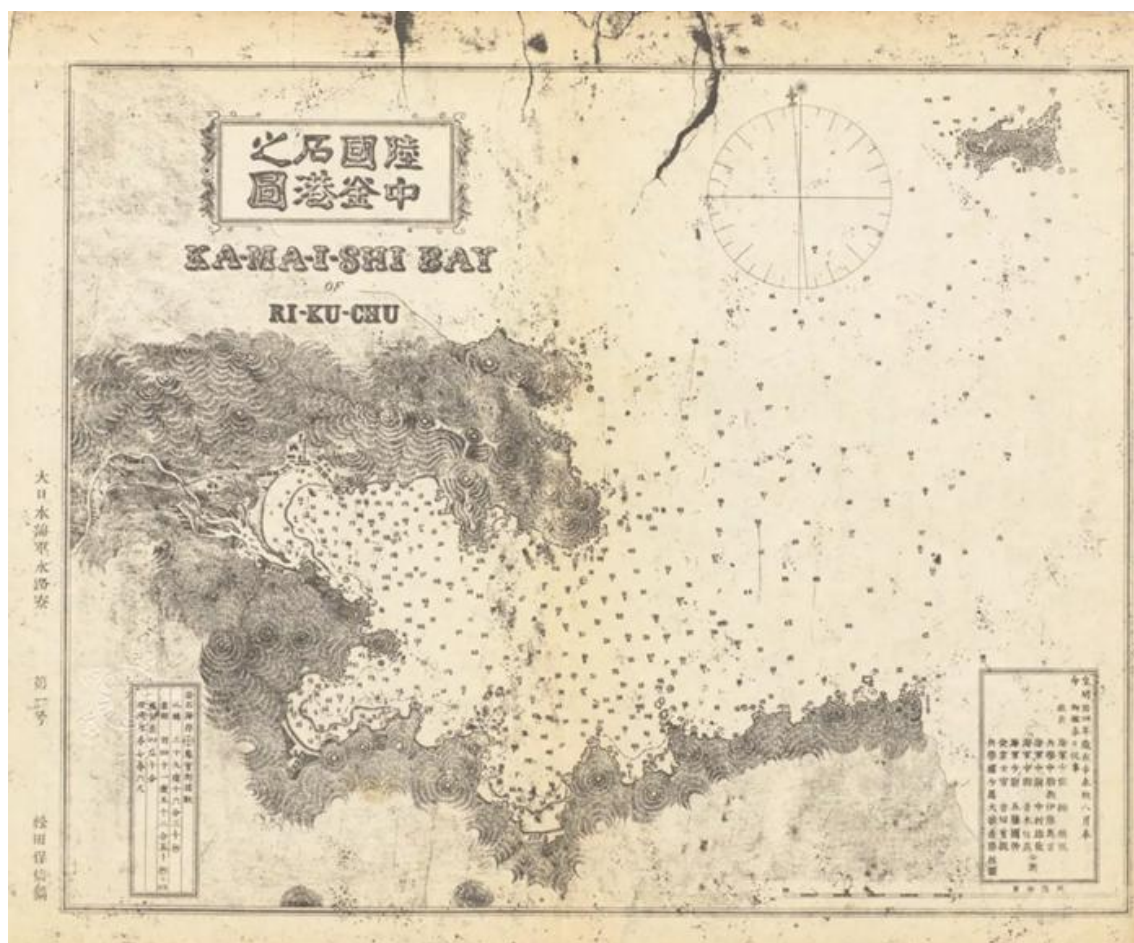
鬱陵島(ダジュレー島)には「松島」「MATU I」、竹島のうち西島には「ヲリウツ瀬」、東島には「メ子ライ瀬」の名が書かれている。この頃実在しないことが確認され始めていたアルゴノート島の姿は描かれていない。なお、朝鮮半島西部については、未測量の部分がそのまま残されている。

『大日本海陸全図』は公式には一般には刊行されなかった地図ではあるが、実際にはすべて廃棄されたわけではなく、いくらかは現存している。『水路部沿革史 明治2-18年』にもその名が挙げられていることから考えても、当時のインパクトが大きかったことがうかがえる。

『大日本海陸全図』の「松島」と「ヲリウツ瀬」、「メ子ライ瀬」



『陸中国釜石港図』明治5年(1872年)8月

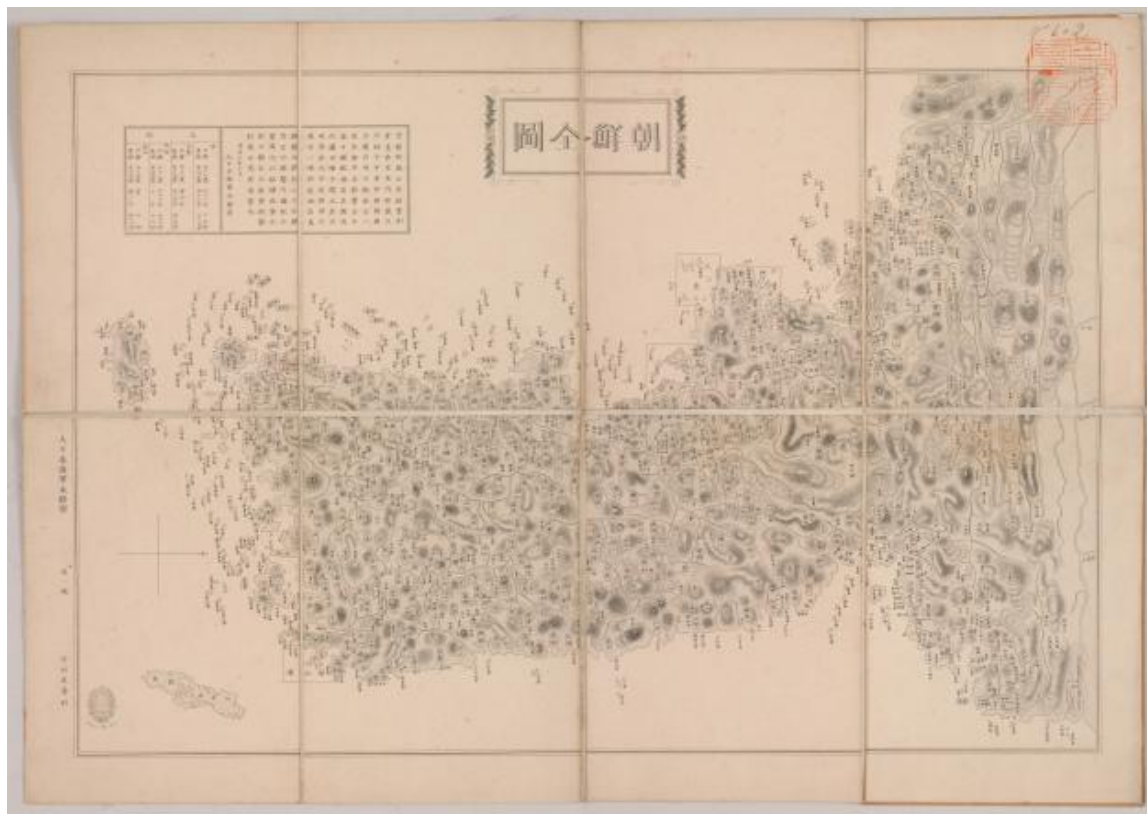


出典：『水路部沿革史 自明治 19 年至大正 15 年』

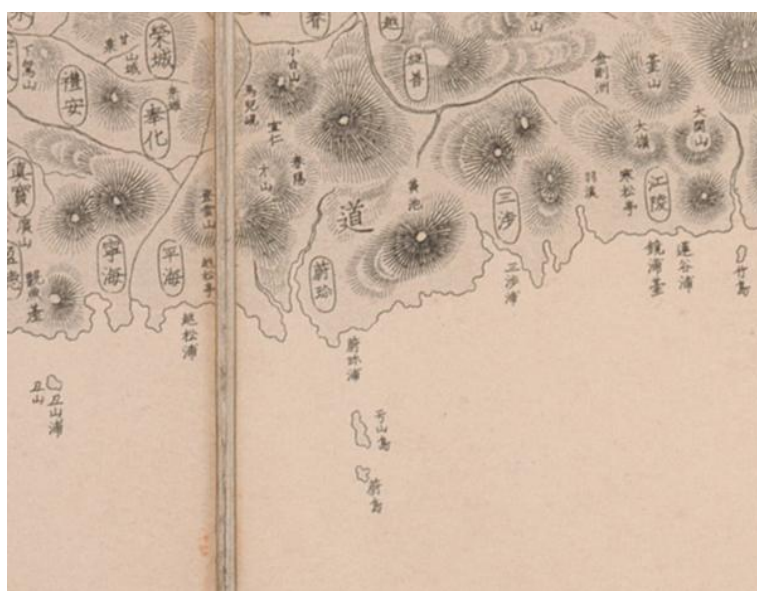
右下部分拡大



『朝鮮全図』 明治 6 年(1873 年)7 月 (地図中には「明治六年十月」と書いてある)



(部分拡大)



出典：島根県『最終報告書(平成 19 年 3 月)』

<https://www.pref.shimane.lg.jp/admin/pref/takeshima/web->

[takeshima/takeshima04/kenkyuukai_houkokusho/takeshima04_01/takeshima04d.html](https://www.pref.shimane.lg.jp/admin/pref/takeshima/web-takeshima/takeshima04/kenkyuukai_houkokusho/takeshima04_01/takeshima04d.html)

『魯西整儀写真鑑』

嘉永6年（1853年）に長崎に来航したプチャーチンの艦隊を描いた版面のうち艦船を描いたもの。
作者は川原慶賀といわれている。



『魯西整儀写真鑑』よりフレガート艦「パルラダ」《Паллада》（手前）と「メンシコフ公」

《Князь Меншиков》（露米会社の所属のため、軍艦旗ではなく露米会社の旗を掲げている。）

（国立国会図書館デジタルコレクション [info:ndljp/pid/1304114](http://info.ndljp/pid/1304114)）



『魯西整儀写真鑑』よりコルベット艦「オリヴツァ」《Оливуца》（手前）とスクナー船

「ヴォストーク」《Восток》

「オリヴツァ」は1846年までは「メネライ」《Менелай》と称していた

(国立国会図書館デジタルコレクション [info:ndljp/pid/1304121](http://info.ndljp/pid/1304121))